

女性や若者から選ばれる地域となるために

秋田経済研究所

理事長 新谷 明弘

当研究所では設立以来、特色ある経営をされている企業に対して「中小企業振興表彰」を行っています。第47回目となる2025年度の表彰式を6月10日に開催し、複雑化する経営課題に独創的な取組みをされている県内企業2社と福島県郡山市の企業1社を表彰いたしました。今月号では表彰された3社の取組みについて紹介しています。参考にさせていただきたいと思います。

今回の受賞企業の1社が、株式会社青山精工様です。同社の青山社長は、昨年秋に開催されたセミナー『若者の働きたい魅力ある企業・地域づくりに向けて』において、パネリストの一人として登壇されました。

今月号の「受賞者のご挨拶」の中でも説明されていますが、青山社長は社員とその家族との関係を非常に大切にしている経営をされています。それは会社が求めていることを家族にも理解してもらい、決して楽とはいえない「働く」ことの意味ややりがいについて、家族も含め理解し、感じとってほしいと願っているからです。社内で開催するイベントや行事には家族も参加し、またお子さんのスポーツなどの支援にも積極的に取り組んでいます。

青山社長は、女性活躍に対しても同様の考えをお持ちで、昨年のパネルディスカッションの中で女性活躍について次のように話しておられます。

「子どもの進路に与える影響は、母親が一番大きい。地元就職するかしないか、外に出て戻ってくるかどうか母親の影響力が大きい。そのためには母親が秋田の暮らしを楽しんでいることが鍵となる。仕事を頑張って、家に帰ってきたら育児と家事に追われて自分の時間がない母親の姿と、仕事も家事も育児もしながら休みの日には自分の時間を楽しんでプライベートも充実して生き生きとしている母親の姿のどちらを見たら秋田で暮らすのでもいいな、戻りたいと考えるか。残念ながら理想と現実には地域差があり、地元のクラス会で東京の友達に会いに行く話が出ると、男性はすぐに『行こう』となるが、女性は『子どもがいるから』『旦那が何というか』『ちょっと無理』とネガティブな意見になる。一方札幌の出身大

学の友人たちとの集まりでは、『来年1泊旅行に行こう』という話に皆さん『行こう』と積極的な返答になる。『子どもは大丈夫?』と聞くと『大丈夫』という返事で、地域差に驚くとともに秋田での暮らしづらさを感じてしまう。

私は、女性活躍とは職場と家庭に加えて、自分の時間を含めた三角形の形であるべきところが、家庭と職場の両立だけになっていると感じる。女性が秋田での暮らしを楽しいと感じ、それを発信できる環境や文化をつくれると、結婚・出産にもつながると思う。」

また、先日秋田市で開催されたある講演会において、偶然にも青山社長と同様の指摘を受ける機会がありました。

「女性に選ばれる地域づくりとは、政府が掲げる『子どもを産んでも働き続けられる社会』というフレーズではなく、『子どもを産んでも人生が楽しめる社会』であって、出産後も当たり前で遊べる、女性が子どもを産んでも遊び続けられる、人生が楽しめる社会でなければならない。『結婚したのだから、子どもができたのだから我慢しなさい』という時代ではないはずなのに、まだこうした考えが残っている地域では若者や女性から選ばれない。」というものです。

こうした指摘には、指摘されなければ気づかない無意識の思い込みのようなものが存在している気がしています。生まれ育った時代環境の違いからくる世代間の意識の差もあるように思いますが、とはいえこうした意識の差が肯定される時代ではありません。

本県の女性の就業割合は、働き手の不足を背景に全国平均を上回って推移していますが、青山社長が求める「秋田での暮らしを楽しいと感じながら働いている女性」の割合がどの程度なのか、まだ少ないとすると、この本質を理解したうえで、企業や家庭、そして行政においても女性活躍の目的や目標を見直す必要があるように思います。職場と家庭だけでなく「自分の時間」という視点から「秋田の暮らしを楽しいと感じる」働き方ができる社会づくり、まちづくりが求められます。そして、世代間のギャップを埋めるためには、反目しあうのではなく、高齢者の多い地方であればこそ、若い人たちの話を聞き、また高齢世代が経験から身につけている子育てなどの知恵を教わるといった、お互いに助け合い、支え合いながら多世代が交流する機会を意識的に創り出すことも大切な気がします。